5

平戸市度島

NPO法人 度島地区まちづくり運営協議会

人　口	645人
世帯数	226世帯
設　立	平成25年9月

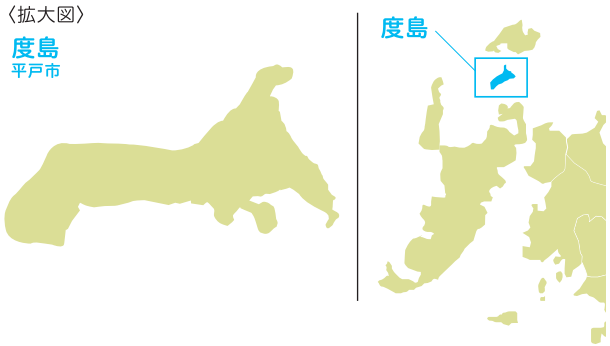
（令和3年10月1日現在）

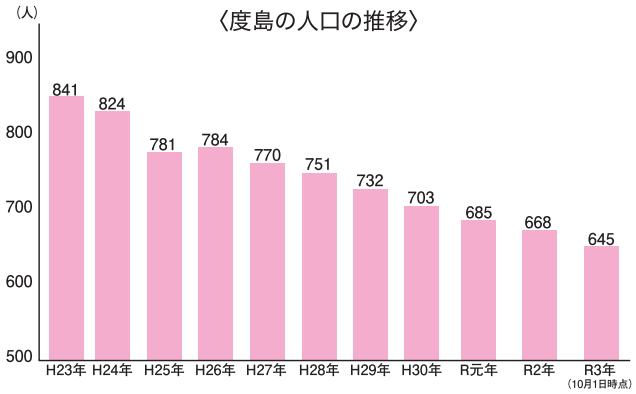
地域の現状と課題

平戸島の北に位置し、東西に約3.5キロ、南北に約1キロの横長の島です。主な産業は漁業と農業で、島内の男性の大半が1カ月ほど海に出る遠洋漁業に従事しています。島の中央部には、市立度島小・中学校が立地。島外からの交通手段は、1日4便の「フェリー度島」が運航されており、平戸港から度島まで30～40分程掛かります。島内にはバス、タクシーなどの公共交通機関はありません。

度島は、「度島浦」「度島中部」「度島三免」の3つの自治会で構成されています。10年前に841人だった島内の人口は、645人まで減少しました。人口全体に占める65歳以上の高齢者の割合（高齢化率）は36.9％ですが、成年男性はまき網漁業で日中のほとんどを海に出ているため、島内にいるのは大半が高齢者と女性、子どもです。警察署、消防署、市役所の支所などは無く、行政サービスが行き届きにくいのが現状です。

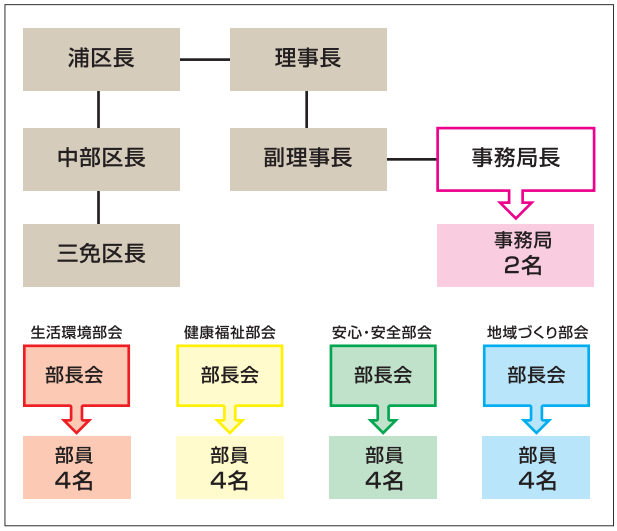
島民の中には、食料品などの買い出しが高齢になると困難にならないかという不安や担い手が少ない中での自治会組織の維持など人口減少に伴う地域の課題がありました。このような課題を受けて、子どもから高齢者までいきいきと暮らせる島を目指し、平成25年10月に国土交通省の「小さな拠点」形成推進事業の助成を受けて平戸市初となる「度島地区まちづくり運営協議会」を設立しました。





平戸港と度島の飯盛港、本村港をつなぐフェリー度島＝令和3年11月、平戸市度島町

鉢巻きをしたやる気のある元気な優しい人を
イメージした協議会のシンボルマーク



協議会の構成図

「月イチ床屋」の様子＝平成27年9月、平戸市度島町

現在の主な活動内容

〈運営上の課題と克服手法〉

島では、知らないものや初めてのことを〝良いこと〟として素直に受け入れられず、遠ざける風潮がありました。市内初の協議会だったため、設立当初は、正解も不正解も分からないまま奔走。運営に携わる人を集めることも難しく、何から事業着手すれば良いのか分からないという状況でした。しかし、**市の地域協働課職員の週１回以上の訪問や、集落支援員の常駐**により、住民のニーズをより細やかにすくい取り、行政に相談しながら事業化を図るという仕組みが構築され、まちづくりの推進につながりました。現在に至るまで、アンケートの実施や住民の困り事、悩み相談を受けてすぐに取り組むというスピード感がある運営がなされています。例えば、島内に理容室がなく「平戸まで行くのは大変だ」との声を受け、月に１回理髪師を呼んで散髪してもらう「月イチ床屋」は、さらなる要望を受け**「月イチシリーズ」**として、カイロ、ヨガ、マーケットまで拡大しています。**協議会がニーズに応えてくれるという期待と信頼**から住民の要望や声が集まるようになりました。

〈コミュニティバス運行の取組〉

設立にあたって、事務局で島内の困り事の洗い出しを行い、公共交通機関がないことから、住民が買い物や診療所に行く際の足となる**コミュニティバス**を走らせることを目標に定めました。市社会福祉協議会からの車両の寄贈を受けるために平成２５年１１月に要望書を提出し、平成２６年１０月に福祉車両を贈呈されました。同１０月に**全島民を対象にアンケートを実施**し、車の保有状況やバス運行の賛否、利用する場合の目的や頻度、時間帯など詳細にニーズを調査。アンケートの結果、８割がバス運行に賛同し、利用目的と時間について診療所の通院では往路の朝８時、復路の１０時、１１時のニーズが高いことなどが分かりました。その後、各自治会ごとにバス

高齢者らの生活を支えるコミュニティバス＝平成27年6月、平戸市度島町

の情報提供、「地域住民の乗り支え」の機運を高めるために住民意見交換会を実施。料金は１回１００円で路線＝右図＝も決定し、運転手は島民から募集し、３人を雇用しました。時給８５０円で雇い、拘束時間で計算し支払っています。試験運行期間を経て、平成２７年１月から正式に運行を始め、当初は火曜と金曜に行われるミニデイサービスに合わせて走らせました。

平成２７年６月にはミニデイサービス時の利用時間にかからないように変更し、平成２８年９月には、フェリーの最終便に合わせて運行してほしいという要望を受け、便を追加するなど、利用状況や要望を受けて柔軟に対応し、今に至るまで地域の足として欠かせない存在となっています。

バス停	近隣の施設等	区間距離
① 崎瀬		
② 崎瀬の鼻入り口		350m
③ 飯盛港	フェリー発着港	620m
④ 三免格納庫	墓地	180m
⑤ 湯牟田十字路		500m
⑥ およりまっせ前		800m
⑦ 中部小川	中部地区公会堂	340m
⑧ ふれ愛センター度島	診療所、保育所	360m
⑨ 本村港	フェリー発着港	410m
⑩ 郵便局前	浦地区公民館、漁協	200m
⑪ さがり		235m

コミュニティバスの路線図

POINT

- 公共交通機関の代替としての買い物や診療所に行く際の地域の足
- 運行前に全島民を対象にアンケートを行い、詳細にニーズを調査
- 利用状況、要望でダイヤ・便数見直し

INTERVIEW

度島のブランド化に注力

今後注力したいのは、「遠いけども行きたい」「名前が付いているから買いたい」と思わせるような度島のブランド化です。攻めの姿勢で取組を進めます。各協議会同じように市の交付金をもらっていますがせっかくなら他の地域にうらやましがられるような使い方をして、島民に楽しく暮らしてもらいたいです。引き続き島民のお困り事解決のための取組を推進します。私自身Uターンで29歳の時に島に戻り、当初は正解も不正解も分からない中、活動をスタートしました。ただ、イベントを実施したり、中学生にまちづくりに参画してもらったり、月イチシリーズを始めたりするなど、活動を充実させることで盛り上がっていきました。私はどちらかといえば外で住民と接するほうが好きです。机に縛られることなく自由に活動できるのも一緒に働く職員のおかげです。感謝しています。

度島地区まちづくり運営協議会
事務局長
森　健司さん

行政からの支援

市地域協働課職員が定期的に訪問しており、新たな取組を行う際の制度設計などについて相談しています。市の別の課のサポートが必要な際は、地域協働課職員が橋渡し役になっています。令和３年度の「平戸市コミュニティ推進モデル地域交付金」では、５３３万４千円が本協議会に交付されました。令和３年３月には市の支援を受けて「度島交流会館」を新設し、既存の施設から事務所を移転しました。

令和3年に新しく建てられた度島交流会館＝令和3年11月、平戸市度島町

今後の課題・展望

昨今のコロナ禍によりワーケーションやリモートワークが急速に普及し働く場所を選ばなくなりました。そのような観点で度島が様々な地域の中から**「選ばれる島」**になるためには、島外に発信できる特産品をはじめ、島の新たな魅力づくりが求められることから度島のブランド化に注力していきます。

また、令和３年１１月には、家庭菜園など農業を行っている人が島外で重い肥料、土を購入し、持って帰るまでが困難という相談を受け、「島の肥料屋さん」という新たな支援を始めました。これは住民から一定期間の間に肥料の注文を受けて先払いしてもらった後、協議会で島外で一括購入し、後日「ふれ愛センター」前で受け渡しを行う取組です。**協議会は今後も要望や悩みを受け、スピード感をもって住民のニーズに応える取組を続けます。**

最大5㌧まで注文できる「島の肥料屋さん」のチラシ

INTERVIEW

いつまでも忘れない島に

度島地区まちづくり運営協議会
理事長
堺　勇二さん

設立当初から協議会に携わっていますが、最初は何から取り組めばいいのか分からず、人を集めるのも本当に大変でした。年配の私たちは箱から飛び出るような斬新な考えは浮かばないので、若い人のアイデアをもって積極的に取組を進めていけたらと思います。できるだけ現場の判断や思いを大切に、引き続きスピード感を持って対応していけたらと考えています。直近では、消防署などがない度島で、万が一の災害時の行動や備えについて考える「WAKUWAKU防災まつり」を全島民を対象に令和3年９月に開催し、非常に心に残っています。これからも**住民がお互い助け合ったり、守ったりする家族のような島であり続けてほしい**と考えています。島外に出た住民が、長期休暇だけでなく、普通の土曜、日曜にも帰ってきたいと思うような、いつまでも忘れない島であってほしいです。

まとめ

① 公共交通機関の代替としての買い物や診療所に行く際の地域の足
② 運行前に全島民を対象にアンケートを行い、詳細にニーズを調査
③ 利用状況、要望でダイヤ・便数見直し
④ 協議会がニーズに応えてくれるという住民の期待と信頼
⑤ 「月イチシリーズ」など、住民のニーズにスピード感を持って応える取組
⑥ 高齢者の心の拠り所に

取材を経て

協議会に対する住民の関心や期待が高く、定期的に協議会が開催している様々な教室も参加率が高いのが印象的でした。事務局の信頼度が高く、地域とのつながりの深さを感じます。特に高齢者が参加する介護予防教室の「たくしま大楽」では、講師兼サポーター役を住民が務め、体操や計算ドリル、合唱などの進行を行いながら、参加者と楽しく会話をしており、高齢者の心の拠り所にもなっていました。住民主体で取組を進め、地域で地域を支えていることが分かりました。「月イチシリーズ」も平成２７年から年々拡大を続けており、単発ではなく継続的な取組が多いのも特長です。

今後、特産品やここにしかない島のスポットなどが誕生すれば、新たな地域の魅力や住民の誇りにもなるはずです。